

連載 オブジェクト指向と哲学

第 86 回 デカルト、炉部屋の夢(5)

河合 昭男

<http://www1.u-netsurf.ne.jp/~Kawai>

インスピレーションはその人にしか理解できない形で降りてきます。一つのことをずっと考え続けている人にあるタイミングで重要なヒントが与えられます。古来、馬上・枕上・廁上の三上がその代表的な場所だとされています。枕上は枕の上ですが、眠っているときに夢として見ることもあります。デカルトが見たという「天から降ってきたとしか考えられない」3つの夢も条件が整ったタイミングで見せられたのだとも考えられます。

●薔薇十字

薔薇十字団の活動がその重要なきっかけです。ここでその証明をしようというつもりはありませんが、デカルトと薔薇十字との関係を見てゆきたいと思います。薔薇十字団は 1614 年から 3 年の間に続けて 3 冊の本「ファーマ (薔薇十字団の宣言)」、「コンフェシオ (薔薇十字団の告白)」、「クリスティアン・ローゼンクロイツの化学の結婚」をドイツで出版し評判になります。([1]および[2])

薔薇十字という呼称は、実質的創始者の名前クリスティアン・ローゼンクロイツ (1378 - 1484、106 歳、C.R.C と略される) によるもので、隠されていたその思想を発見した人たちが薔薇十字団として活動を始めます。

1619 年春 23 歳のデカルトはオランダのブレダを出てボヘミアに向かう。ボヘミアは薔薇十字団の震源地であり、ベークマンに宛てた手紙には本当の理由は書いていないが薔薇十字団との接触のためである。([2]p82) 「ファーマ」の表紙には「世界全体の全面的改革」とあり、学問について『一生に一度は、すべてを根こそぎくつがえし、最初の土台から新たにはじめなくてはならない』[5]と考えていたデカルトは大いに共感を感じたであろう。

デカルトは薔薇十字団についていつ頃知ったのであろうか。炉部屋の 3 つの夢を見た 1619 年 11 月 10 日より前か後か、つまり夢には薔薇十字が影響しているのかどうか。

●バイエの説

バイエのデカルト伝には 3 つの夢の後、薔薇十字について記述されているが、その冬のこととしている。

--

この冬の間、彼の独居生活は、常に全く申し分のないものであった。彼に話題を供することができないような人々を寄せ付けぬという点では、とりわけそうであった。しかしながら、学問とか文学上の消息とかを談ずる心得のある好学の士たちが、彼の部屋から締め出されるようなことはなかった。少し前からドイツにできていた、「薔薇十字兄弟会」と称する学者たちの団体の噂を彼が聞いたのは、そうした人々との談話においてであった。[3]p37

--

バイエによると、一人で 1 日中誰にも邪魔されずにいた筈の炉部屋がまるでサロンのように人が集まってくる場所になっている。バイエはさらにこの炉部屋サロン説を続ける。

--

人々はこの会のことをひどく褒めて彼に話した。彼が聞かされたところでは、その会の会員たちはなんでも知っていて、世間の人々に、新しい知恵、すなわち、まだ発見されたことのない真実の学問を、約束しているというのであった。いろいろな人からそれについて聞かされる数々の不思議な話と、この結社が全ドイツにひき起こしている騒ぎとを考えあわせて、彼は動揺を感じた。その噂が彼の耳に入ったのは、真理の探究のために自分のとるべき方策について彼が最も迷っていたときであっただけに、動揺はいっそうはげしかった。[3]p37

--

田中仁彦氏は、このバイエのデカルト伝の記述を疑問とし、デカルトがオランダのブレダを出たときすでに薔薇十字団の噂は聞いており、それがドイツに向かう動機であったに違いないと指摘する。[2]

●方法序説第 2 部の炉部屋の状況

1619 年冬の状況を、デカルト自身は方法序説第 2 部に次のように記している。

--

皇帝の戴冠式を見たのち、軍隊に帰る途中、冬がはじまってある村にとどまることになったが、そこには私の気を散らすような話の相手もおらず、また幸いなことになんの心配も情念も私の心を悩ますことがなかったので、私は終日炉部屋にただひとりとじこもり、このうえなくくつろいで考えごとにふけたのであった。[4]p14

--

バイエは、この炉部屋にはサロンのように人が集まってきたとしているが、そうは読み取れない。もしそうならデカルトはここにその様子も書いたのではないか。つまり夢を見る前に薔薇十字のことは十分知っていて、なんとかメンバーを見つけて直接話をしたいと考え続け、その強い思いが夢のきっかけになったに違いない。

●薔薇十字とライプニッツ

ライプニッツは 1676 年 6 月 1 日、デカルトの遺品のノートを引き取ったクレルスリエを訪ね、一部を筆写する。3 つの夢を記述した「オリンピカ」と密接な関係のある別の断章「序言」に注目する。

--

全世界の博学な学者たち、特に G.F.R.C に再度捧げる。[1]p226

--

の G.F.R.C を「G (ゲルマニア) .F.R.C」として筆写する。

--

ライプニッツは、「F.R.C」という頭文字が何のことだかよく知っていた。それは「薔薇十字団」(Fraternitas Roseae Crucis) を意味していたのだ。ライプニッツは、薔薇十字団が刊行した全書物に精通していた。彼は「薔薇十字団の宣言」についてもよく知っており、その細部について私信のあちこちで延々と議論を展開したこともあった。またライプニッツ自身の著作にも、「薔薇十字団の宣言」から直接引用したように思える、この秘密結社の色合いを強く帯びた箇所が見られる。ライプニッツは 1666 年にニュールンベルクで薔薇十字団に加入していたのである。複数の資料によれば、ライプニッツはこの結社の書記にまで選ばれたという。実は薔薇十字団は、ニュールンベルクの錬金術師団体の上部組織であった。[1] p226

--

この「序言」の日付は分からないが、「再度捧げる」という程、デカルトは薔薇十字団を十分意識していた。

以下次回...

参考書籍

[1]アクゼル、【訳】水谷淳、デカルトの暗号手稿、2006、早川書房

[2]田中仁彦、デカルトの旅／デカルトの夢、2014、岩波現代文庫

- [3] アドリアン・バイエ、【訳】 井沢義雄／井上庄七、デカルト伝、1979、講談社
- [4] デカルト、【訳】 野田又夫／井上庄七／水野和久／神野慧一郎、方法序説ほか、2001、中公クラシックス
- [5] デカルト、【訳】 井上庄七／森啓／野田又夫、省察／情念論、2002、中公クラシックス